

入管法粉砕へ向けて

全念の明治大学の学友諸君に

評者。日本帝国主義の侵略・反革命といつての七〇年代に於いて我々日本人に課された道は二つしかない。帝国主義の具現である「平和と繁栄」の道を歩み、資本家からのおぼれにはかない夢を抱き、彼の尖兵となつてこれ以上朝鮮人民、中国人民を始めるとするアジア人民の血を吸い取り続けるのか。それとも意識するしないにかかわらず、歴史的現時的に抑圧民族として生きてきた自己を国際主義の闘いの渦の中に投じ、抑圧民族としての自己の立場を不断に解き、止揚し、最後の解放を自らの力で得ようとするのか。

出入国管理団体とは出入国管理令に基づき出入国管理行政に名をかりた日常不断な在日被抑圧民族(朝鮮人・中国人)に対する弾圧・国家権力の監視・強制収容、強制送還であり、そしてそのような国家権力の弾圧を見逃し、容認し、さらには積極的に加担しようとする日本人の意識、思想そのものである。すなわち植民地人民・被抑圧民族の犠牲の上に成立している日本の帝国主義的経済基盤そのものであり、支配構造そのものであ

る。現時的に帝国主義本國國民として我々が、いかに「賃労働と資本」の関係においても被抑圧階級であるといつても、帝国主義本國の國民であるが故に他民族を抑圧している民族であることは否定しえない事実である。この認識なしには「入管体制」を正しく把握しえないし、それに対する真の国際主義的闘いも一切組み得ない。

我々は入管体制を粉砕せんとする時、過去の歴史をふまえて、そこから出発せねばならない。一九三三年関東大震災当時、日本人民は国家権力に扇動されたといつても自らの手で「犯罪者」にデッチ上げられた朝鮮人六千余名、中国人数百名を竹槍、オノ、棍棒で虐殺していった。そして中国侵略の過程で二千万中国人を大虐殺したのは一握りの支配階級ではなく、帝国主義の尖兵となつた多くの普通の日本人ではなかったのか。四一年太平洋戦争勃発以後、日本軍の徴用あるいは日本での労働力として三三四万の朝鮮人が強制連行され、多くの人は花崗炭坑事件に見られる如く奴隷的労働の下におかれ、多数が虐殺されていった。強制連行、流民あ

るいは日本軍にだまされて日本軍に連行された朝鮮人民は戦後当時には二七万人にも上つていた。彼らは戦後の集団引揚げにより一五〇万人が帰国した。

米帝占領軍と日本政府は日帝の敗北と呼応して戦時中抑圧しつづけた在日朝鮮人民が蜂起するのを恐れ「帰還政策」をとつ

た。同時に勝利前進する中国・朝鮮革命を恐れ米帝占領軍は日本に残つたり、あるいは再入国した朝鮮人の革命的戦闘性を弾圧すべく、在日朝中人民に焦点をあて、占領軍には一切規制力を持たない入管体制を作りあげていった。

日中十五年戦争敗北を結果として日帝は第二次帝国主義戦争に敗戦した。米帝の反共の誓日本は朝鮮戦争において、資本主義の芽を再生させ、六〇・六一年皆戸景気、六四・六五年の不況を経過し、六五年日「韓」条約締結をもって南朝鮮に大筆経済進出を行い、その危機を乗り切つた、それ以降今日までの「韓国」「台湾」を始めて、アジアに対する侵略が開始された。現在の日本帝国主義の復活とアジア再侵略過程の全面的進行は南朝鮮人民の血の出るような過重労働と低賃金(国民平均年間所得五万余円)、たえまなインフレーションを踏台にして進行しているのである。

いは極刑に課せられた人々も少なくない。先進的な人々の交友関係だけでも弾圧(強制送還)された例もある。そしてまた、現在急激に増加しているのが在日朝鮮高校生に対する日本人学生(一部の右翼を除いては多くはいわゆる普通の学生)による集団暴行である。彼らは国土拡大、拓大、日大の右翼の指導下で「朝鮮高校をなくす会」に組織され連日のように鉄パイプ、チェーン、のんちゃく、日

本刀、木刀などを武器にし、登下校中の朝鮮高校生を襲ひ、重傷を負わしている。しかも官憲は被害者の朝鮮高校生を一加重害者として連行し、思想調査を行い、またスパイを演説するなどの暴挙に出ている。四月から五月のわずかに三月月たらずの間に暴行事件が判つただけでも二九件起つていて、これはほんの冰山の一角である。そして、うち二〇件以上が国土館高校生によって行われている。国土館高校生の間には「東京国際パト

ロール」なる組織が作られ、組織的に暴行を行っている。「朝鮮高校をなくす会」は背後に暴力団「極東組」「任吉会」があった。前者は日「華」、日「韓」協

力委員会の総帥で戦前、戦中指導した第一級戦争犯罪者であるべき、元首相の岸信介と明確につながつており、暴行は日帝政治委員会のバック・アップをうけていることは明らかである。そしてまた、朝鮮大学校に対し

ことになつた。日帝が「日米共同声明」によって日本帝国主義同盟再編強化し、前進するアジア革命に真向うから敵対し、日米両帝によるアジア侵略・反革命の拳に出ている。われわれはレーニン主義を堅持し、七〇年代階級闘争を日米共同声明路線粉砕・安保路線粉砕・入管体制粉砕という二本の国際主義の原則に基ついた戦略を設定する。そして具体的な運動としては、戦線の育成・強化に向けた地殻実行委員会運動の力で、日常的な在日朝鮮人・中国人に対する弾圧を粉砕しぬいていく。地殻実行運動の提起としては、入管法粉砕闘争から入管体制粉砕闘争への眞の飛躍の表われてあり、華僑青年闘争委員会の諸君の提起した日常的国際主義の闘いである。敵権力は在日朝鮮人の政治地図を作るうとして、われわれもすでに地区の政治地図を作るべく調査活動の態勢を整えた。われわれは他民族を弾圧する民族は自らを解放することは出来ない」という原則を常に認識し、具体的な闘争の中で、在日朝鮮人高校生に対する右からの暴行を裏力で粉砕する責務を獲得せねばならない。七・七集会の過程で問われきたのは、われわれ日本人がいかに自己を抑圧

他民族抑圧の総決算

ファツシヨ化する国家の露呈

入管体制という弾圧は、われわれいよいよ新左翼の受ける弾圧と同じ尺度では決して計れない(入管令二四条等)。日本のアウシビツツといわれる大村収容所は、五〇年前後在日朝鮮人民の尖鋭な闘いを庄殺し、大量の強制送還を行うために作られたものであり、この十六年間に延べ二万五千余名が収容されて、一万五千余名が強制送還されている。そのような弾圧の中で朝鮮人は「韓国」に中国人は「台湾」に強制送還され、死刑、あ

ても、国際勝共連合と官憲の一体となつた挑発・弾圧が相次いでいる。在日朝鮮人民六〇万、中国人民五方の人々は形は異なるけれども、日常的に入管令の下で政治的弾圧をうけ、そして日本人に差別されて生活しているのだ。諸君はこの現実をどう見るのか。われわれが沈黙し、あるいは無視することは、とりもなおさずそのような日々の弾圧、差別に加担し、結果的には第二次帝国主義戦争時のように侵略

民族として認識しているのか。そして在日被抑圧民族を自らの闘いの中にどう位置づけるのかであった。第二インターの歴史が示すように、今や国際主義として自国帝国主義打倒のみを語るのは決定的に不十分である。自国の植民地人民、被抑圧民族への抑圧と取巻の上に安定した上で帝国主義本國における階級闘争を闘つたときで、それは改良主義、修正主義、「国主義社会排外主義」にかならないことは明白である。それらの党は常に植民地人民、被抑圧民族の闘いを過小評価し、それとの結合をもって抑圧民族と「その自己の立場を止揚することを考えぬいていく。地殻実行運動の提起としては、入管法粉砕闘争から入管体制粉砕闘争への眞の飛躍の表われてあり、華僑青年闘争委員会の諸君の提起した日常的国際主義の闘いである。敵権力は在日朝鮮人の政治地図を作るうとして、われわれもすでに地区の政治地図を作るべく調査活動の態勢を整えた。われわれは他民族を弾圧する民族は自らを解放することは出来ない」という原則を常に認識し、具体的な闘争の中で、在日朝鮮人高校生に対する右からの暴行を裏力で粉砕する責務を獲得せねばならない。七・七集会の過程で問われきたのは、われわれ日本人がいかに自己を抑圧

われ日本人がいかに自己を抑圧

われ日本人がいかに自己を抑圧

われ日本人がいかに自己を抑圧

笠岡良夫
(入管体制粉砕大実行委員会)